

「表面科学」執筆の手引き（2007年7月12日改訂）

1. 投稿原稿の作成

1.1 原稿の構成

論文・速報・ノート・総合報告・研究紹介・ポピュラーサイエンス・実験ノウハウ・談話室・企画記事の原稿は以下の順に表記すること。

原稿第1 ページ：

- 1) 表題
- 2) 著者名
- 3) 所属機関名
- 4) 所在地
- 5) Title
- 6) Author(s)
- 7) Affiliation(s)
- 8) Address

原稿第2 ページ：英文要旨およびキーワード

原稿本文の内容の要旨を英文で書く。論文・総合報告・研究紹介・ポピュラーサイエンス・企画記事は150語程度、速報とノートは70語程度とする。ギリシア文字などの特殊文字の使用は出来る限り避けること。談話室・実験ノウハウへの投稿原稿では英文要旨（および和文要旨）は不要である。

論文・速報・ノート・総合報告・研究紹介・ポピュラーサイエンスでは、英文キーワードを5つ以内で取り上げ、英文要旨の下に Keywords: に続けて書くこと。

原稿第3 ページ：和文要旨（原稿を全て英文で書く場合には必要ない）

英文要旨の内容を和文にしたもの。和文要旨自体は刷り上り論文には現われないが、英文要旨を校閲する際に使用する。

原稿第4 ページ以降：原稿本文

和文の場合には常用漢字を用い、新仮名遣いで書くこと。英文の場合には、米国綴りを推奨する。

1.2 原稿の体裁

A4判用紙サイズを使用し、周囲に2~3cm程度の余白をもうける。和文は明朝系の全角フォントを、英文は Times 系の半角フォントを用い、10.5ポイントの文字サイズを使用する。一ページ約25行、一行約45文字とし、一段組みで作成する。用紙の下中央にページ番号を打つこと。

1.3 原稿の送付

投稿原稿2部（正副原稿）を「投稿票」とあわせて本学会に送付すること。原稿を送付するにあたり、「点検票」により原稿の内容を確認すること。

送付資料は ① 点検票, ② 投稿票, ③ 正原稿, ④ 副原稿の順に重ね、正副各原稿は (i) 英文要旨, (ii) 和文要旨, (iii) 本文, (iv) 文献, (v) 図表キャプション, (vi) 表, (vii) 図 の順にすること。

1.4 電子ファイルの作成

- a. 投稿原稿は、MS Word 等の市販のワープロソフトで準備すること。編集委員会に送付する投稿原稿の電子ファイルのフォーマットは doc ファイル、あるいは txt ファイルとする（pdf形式のファイルは受け付けない）。
- b. 図の電子ファイルのフォーマットは eps, tiff, jpeg とするか、もしくは MS Office ファイル(Word, Excel, Power Point)とする。
- c. 電子ファイルの送付は、最終査読が終了した際とする。フロッピーディスクや CD-R などのメディアの郵送、もしくは電子メールでの送付とする。郵送されたメディアは返却しない。

2. 原稿本文作成時の諸注意

2.1 句読点

和文の場合には、句点は「。」、読点は「、」とする。

2.2 数字

本文中で使用する数字は、原則としてアラビア数字とする。位取りのコンマは付けない。

[例] 1,500 K → 1500 K

漢字やひらがなと結合し、名称として現れる数字は漢数字とする。

[例] 一つ、二重線、三体問題

2.3 立体とイタリックの使い分け指針（ここでのルールはあくまでも指針であるため、論文内で統一されていれば必ずしも従わなくても良い。）

a. 変数を示す記号：原則としてイタリック体。

[例] 座標軸 x , y , z

[例] 化学式、化学反応式の変数 $\text{La}_{2-x}\text{Sr}_x\text{CuO}_4$

[例] フェルミエネルギー E_F （FはFermiを表し、物理量ではないので立体）

[例] i 番目の原子位置 \mathbf{R}_i （ i は変数なのでイタリック体、ベクトル \mathbf{R} は太字に）

b. ラテン語：全てイタリック体とする。

[例] *ab initio a priori ca. e.g. et al. in vivo i.e. in situ vs. etc.*

c. 演算記号・単位：演算記号や単位は立体とする。単位は原則として国際単位系（基本単位、補助単位、固有の名称を持つ組立単位を含む）を使用すること。

[例] \sin \cos \exp d Δ

[例] m（長さ） s（時間：秒） min（時間：分） h（時間：時） mol（物質質量）

kg（質量） K（温度） J（熱量） Pa（圧力） V（電圧） Ω （電気抵抗）

d. 元素記号・電子軌道：立体とする。

[例] Cu, Zn, CH₃OH

[例] 3d 軌道, O 2p 準位

2.4 省略語

省略語は、最初に出てくるところで原綴りを書く。

[例] 密度汎関数理論（density functional theory, DFT）

2.5 外国人名・地名

外国人名や地名は原綴りとする（アルファベット以外の文字の場合は英語綴りに直したものをを用いること）。ただし、人名が学術語となっている場合、日本でよく知られている地名の場合はカタカナを使うことが出来る。

2.6 脚注

本文中に*, **などの記号で示し、それが現れるページの下部に本文とは別の脚注のためのスペースを設け、その欄に脚注を書くこと。

3. 図表

3.1 本文中、図は Fig. 1, Fig. 2, Fig. 3(a), Fig. 3(b), …, 表は Table 1, Table 2, …で指し示すこと。

3.2 図や表のキャプションは英文とする。

3.3 図や表の中では英文を用いること（数量記号として用いるギリシア文字は使用できる）。

3.4 カラー図について。

- a. 著者は、図を白黒もしくはカラーのどちらで出版するかを、投稿票で指定すること。
- b. オンライン版ではカラー図を推奨する。ただし、同じ図を冊子版で白黒図に指定することが可能である。
- c. 同一図をオンライン版でカラー、冊子版で白黒とする場合、著者はカラー図と白黒図の双方を作成しなければならない。

3.5 同一図をオンライン版でカラー、冊子版で白黒とする場合の注意点

- a. 図キャプションでは、次のように color online の文言を付けること。

[例] Fig. 1 (color online).

- b. 本文中では、図に用いた色、または濃淡を指し示す解説をしてはならない。

[してはならない例 1] 赤色で示された領域は…である。

[してはならない例 2] 薄い太線は、…の変化を示したものである。

(注) 同一図が冊子版とオンライン版でカラーの場合あるいは白黒の場合には、これに当てはまらない。

3.6 投稿原稿では、図や表のページには一枚ごとに「Fig. 1. 著者名」、「Table 2. 著者名」などを入れること。

4. 文献

4.1 本文中では引用文献を¹⁾のように、あるいは^{2, 3)}や⁴⁻⁷⁾のように肩書きにした番号で指定すること。

4.2 一つの引用番号に対しては一つの論文のみを引用すること。複数の引用論文を一つの引用番号に割り当ててはいけない。

4.3 本文の末尾に、引用した文献を対応する番号と共に一覧にして記すこと。

書き方は、ジャーナルの場合には「著者名：雑誌名 巻数, 開始ページ (発行年)」, 図書の場合は「著者名：“書名” [エディター名] (出版社, [出版社所在地,] 出版年) [章あるいは開始ページ]」 ([]内は省略可)を基本とする。その他、学位論文、予稿集、特許に関しては下記を参照のこと。

和文ジャーナル・和文図書・英文図書の名称は省略できない。英文ジャーナルは省略が可能である。英文ジャーナルの省略規則はアメリカ物理学会 (APS), もしくはアメリカ化学会 (ACS) のホームページを参照のこと。省略規則があいまいな場合には、省略せず全て書くこと。

http://authors.aps.org/STYLE/style_jabbr.html、
<http://www.cas.org/sent.html>

a. 和文ジャーナル

1) 吉川英樹, 嘉藤誠, 境悠治, 福島整: 表面科学 **23**, 25 (2002).

b. 英文ジャーナル

2) T. Hirahara, I. Matsuda and S. Hasegawa: e-J. Surf. Sci. Nanotech. **2**, 141 (2004).

3) K.L. Brogan, J.H. Shin and M.H. Schoenfish: Langmuir **20**, 9729 (2004).

4) Y. Morikawa: Phys. Rev. B **63**, 033405 (2001).

c. 和文図書

5) 井口洋夫: “シンクロトロン軌道放射光” 市村禎二郎, 旗野嘉彦, 井口洋夫編 (学会出版センター, 1991).

6) 藤本大三郎編: “細胞外マトリックスのバイオサイエンスとバイオテクノロジー” (アイシーピー) p. 111.

7) 井口洋夫: “元素と周期律表” (裳華房, 1980).

d. 英文図書

8) H. Seki: “Electrochemical Surface Science”, ed. by M.P. Soriaga (The American Chemical Society, Washington, D.C., 1988) p. 322.

9) S. Morita, R. Wiesendanger and E. Meyer (Eds.): “Noncontact Atomic Force Microscopy” (Springer, Berlin, Heidelberg, 2002).

10) “Surface Analysis by Auger and X-ray Photoelectron Spectroscopy”, ed. by D. Briggs and J.T. Grant (IM Publications, 2003).

e. 学位論文

11) 近藤剛弘: 筑波大学大学院工学研究科博士論文 (2003).

12) D.A. Mantell: Ph.D. Thesis, Yale University (1983).

f. 講演大会予稿集

13) 石井達也, 加藤英樹, 工藤昭彦: 日本化学会第78春季大会講演予稿集I (2000) p. 322.

14) S. Aramaki and T. Murayama: Proc. of IS & T's 11th Int. Congress on Advances in Non-Impact Printing Technologies (1995) p. 26.

g. 特許

15) 尾形俊昭: 特開昭 59-75205 (1984).

16) J.S. Beck: U.S. Patent No. 5,057,296 (1991).

h. 推奨されない書き方 (英和文混合はなるべく避ける)

17) 例えば, H. Nakai: Chem. Phys. Lett. 363, 73 (2002).

→ 17) See, for example, H. Nakai: Chem. Phys. Lett. 363, 73 (2002).